

《シリーズ対談：教養教育とその周辺》

総合性指向で「教養力」を培う —ローカル最適化からの解放に向けて—

佐々木康成[†], 小西 賢吾[‡], ブローダウェイ リック[§], クラッスン マーシャル^{††}

1. はじめに

この対談シリーズの第5弾となる本稿では、本学教養教育部からアメリカ合衆国出身の二人を迎え、アメリカと日本の大学教育、特にリベラルアーツの制度や教育方法、また、本学で言語を教えられているという立場から語学教育のあり方や言葉の教育の機会などに関する論議を通して、教養教育の方向性や特徴について議論することとなった。一人目は、英語や英米文学を長年にわたって担当され、泉鏡花の作品の英語訳研究で知られている Rick Broadaway (リック・ブローダウェイ) 教授である。二人目は、日本とアメリカとの間を何度も往き来され、日本の大学の学生として、また日本の初等中等教育のチューターとしての経験もある英語教育の専門家、実践家である Marshall Klassen (マーシャル・クラッスン) 講師である。どちらも英語の語学教育を中心に本学では担当され、ICTを用いた効果的な英語教育も積極的に実践されている。本稿では、対談の最初にゲストとして招いた目的と議論のトピックとなる3つについて紹介される場面から始める。

小西(こ) 今日の対談のテーマは、3つほど設定しようと思っています。そこにスケッチブックがあるので書いておきましょうか。
一つ目は、methodologyあるいはtoolsの間

題ですね。教育における方法論です。例えば、ICTの導入であるとか、本学のLMS以外にも効果的な方法にはどのようなのがあったとか、どのような経験をこれまでにしてきたかとか、ですね。

二つ目は、すごく大きくなりますが、languageですね。例えば、先生方がネイティブスピーカーとして英語を日本人に教えるとか、先生方が日本語でお仕事をされるとか、あるいは別の言葉、例えば僕の場合だと中国語に一番親しんでいるわけですが、先生方が日本語や英語以外の言語をふくめて、多様な言葉で学生たちとコミュニケーションされる時にどのようなことを考えられるかなどです。なぜこのテーマかという、この対談シリーズでは、学生にどのように言葉を使ってもらえるのかということについて議論を重ねてきたからです。第2回目の対談では川村先生に日本人の英語教育学者として話していただいたし⁽¹⁾、第3回目の対談では中村先生に国文学の立場から日本語について⁽²⁾話していただきましたが、先生方お二人には英語を日本人に教える立場として教育における言葉の使い方ということについてお話ししたいと思います。

三つ目は、いわゆるリベラルアーツと教養教育ということについて。よくあるテーマか

[†] yasaki@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

[‡] konishik@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

[§] broadaway@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

^{††} mklassen@seiryu-u.ac.jp (Liberal Arts and Sciences, Kanazawa Seiryu University)

もしれませんが、アメリカ式のリベラルアーツというのと日本の教養教育というのとは似ているように見えて違うところがあると思います。先生方がこれまで経験されてきたことと、日本の高等教育の中での教養とはどのように違うのか。違いがあったとして、それを変えていくほうがよいのか、それともそのままでもいいのか、あるいは日本的なやり方があるのかということについて考えていきたいと思えます。

2. リベラルアーツと教養教育

2.1. アメリカのリベラルアーツ

佐々木(さ) 順番としては三つ目からいくのがいいかなと思いはじめますが、まずは、お二人の学生時代からも含めてアメリカで経験されてきたリベラルアーツがどのようなものであったかとか、どのように教えられてきたかということから始めましょうか。

クラッスン(ク) 科目についてですか、それとも教え方についてですか？

さ) 両方ですね。

ブローダウェイ(ブ) 科目だと、必修で歴史とか文学とか政治はありました。選択だと哲学とか音楽とか美術とかがありました。でも、結構幅広い分野が必修として設定されました。一年生のときにありました。その他に英語も国語としてありました。Writingの授業ですね。

ク) それは教養だけでなく、ビジネスでも経済でも学生たちはみんなありました。

ブ) 数学もどの専門でも必修としてありましたね。

さ) さっき歴史が必修っておっしゃってましたね。

ブ) うん、リベラルアーツでは必修でした。

ク) そうですね。選択必修になってるところもあります。歴史と文学と英語といった感じですかね。

ブ) クラッスン先生の方が若いから私のときとは変わってるかもしれませんね。

ク) でも、もう20年くらい前ですね。まあ、もうちょっとオプションはあるはずですが。私の場合は日本語学の専攻だったので、日本の歴史とか日本の文学なども選択しなければならなかったのですが、科学系のもも必要でしたね。例えば、地学のようなのとかね。

さ) リベラルアーツの単位はどのくらいあるんですか？

ブ) 向こうでは週に2回、または3回の授業があるので、単位を数えるのは難しいですね。

さ) 日本の場合だと、例えば、本学では124単位の卒業要件のうち、経済学部だと52単位以上、人間科学部だと18単位以上、人文学部だと42単位以上のようになってますね。おおむね、卒業要件の八分の一から五分の二くらいでしょうかね。ただ、人間科学部と人文学部は、語学やキャリアや基礎ゼミなどの必修科目を除いた一般教養系の科目だけで見ると、それぞれたかだか6単位と8単位となっていて、他は全部専門科目だけで卒業とすることもできますね。

ブ) うーん、おぼえてないですね。ちょうど娘が2年のリベラルアーツの学位を取ったばかりなんですけど...

ク) Bachelor of artsとbachelor of scienceとにわけてるんですけど、bachelor of artsなら90 creditsがliberal arts and science, bachelor of scienceだと60 creditsが必要ですね。bachelor of artsのほうがliberal artsが重たいですね。これはニューヨークの場合ですが、各州によって違うことにはなります。それにさらにいくつかのコースを選ぶ必要があるということになります。

さ) かなり多様に学ぶということですね。

ク) そうですね。

さ) 日本の場合、卒業単位は大学毎に見ても

- ほぼ同じだし、教養系の科目も、例えば金沢大学の場合、どの学類でも30 - 48単位くらいとか、まあ、おおむねそのくらいですね。
- ブ) アメリカの場合、統一するっていうのがないから、州によって違うということはありませんね。
- ク) 日本の場合、英語の科目は絶対合格しないとイケないですよ、グローバル化のせいだ(笑)。
- 全) せいでね(笑)。
- ク) 絶対とらなくちゃなんないっていうのはないんだと思います。たしかに、writingの何かをとらなくちゃなんない、歴史か文学の何かを一つとらなくちゃなんないですけど、それは自分の専攻について、例えば、私の場合は日本語専攻だったので、ヨーロッパ文学とかを受ければ、それはEnglishの単位になるんです。例えば、古事記を読むような授業をとれば、日本語の単位にも英語の単位にもなりますね。その点では日本語の文学をとった方がいいということになりますよね。Writingの単位にもなったので、一石三鳥ということになります(笑)。
- さ) はあーん、一石三鳥ということもありなのか...!!(笑)
- ブ) 娘がとった2年間での単位は、全部で60単位のうち、英語は6単位、学修方法に関するコースが3単位、リベラルアーツに関する幅広い視野での科目が3単位、選択必修として数学が3単位、humanitiesが6単位、社会学6単位、科学6単位、歴史6単位、人文科学的なのが3単位、public speakingが3単位、ここまでの45単位がリベラルアーツで、あとの15単位が自由選択というふうになってますね。
- さ) その3単位というのはどのくらい勉強するんですか?
- ブ) 週に3時間です。月水金なら1時間の授業で3コマ、火木なら1.5時間で2コマというパターンです。
- さ) あ、そういうことか。
- ク) うん、そう、いずれにしても週3時間ですね。
- さ) わかりやすいですね。一週間のなかの1時間が1単位ですね。だから、1週間でもこちらのパターンでも3単位ということか。で、それが何週?
- ブ) 15週です。
- ク) だからあ、授業の時間としては日本の2倍くらいですね。
- さ) んじゃそれはセメスタ制?
- ク) そうですね。
- さ) ちなみにクォータ制をとってる大学ってどのくらいですか?
- ブ) あるでしょうけどね。
- ク) むしろtrimesterをとってるところがありますね。ハーバード大学とかイエール大学とかですね。クォータ制は珍しいくらいです。パデュー大学は3学期制ですが、春と秋が主だったので、夏にも注目して科目を開講してほしかったですね。
- ブ) 3学期制もそんなに多くはないですね。セメスタが一番多い感じですよ。
- さ) 向こうのセメスタっていつからいつでしたっけ?
- ク) 1月から5月と、9月から12月かな。でも、必ずクリスマスの前に試験を行います。約三ヶ月半くらいです。
- さ) で、15週か。なるほど。じゃあ、週3時間×15週=45時間で3単位か。
- ク) まあ、クォータはセメスタの中間試験と思えば、教え方は変わらないですね。
- こ) 日本でクォータ制っていうのは、4月始まりの年度に6月とか11月のような中間期に始まりの区切りもつけたっていうだけだと思っんですけど...。
- さ) ボクの大学の頃は通年科目は夏休み明けに前期の期末試験でした。中間試験みたい

なもんだったんですかね。

ブ) 金沢学院大学も昔はそうでしたね。アメリカの制度で好きなところは、コース番号が100から始まるんだけど、3桁目は学年で100なら1年生、200なら2年生、大学院になれば500とか600とかです。1桁目はクォータ番号で1学期、2学期、3学期、4学期だとそれぞれ101、102、103、104となります。アメリカの場合はどの大学でもそのようなところは一致しています。

さ) 最近はナンバリングとかカリキュラムマップとか大学や学部毎につくるように言われていますから、同じようになっていくと思います。ただし、本学の教養教育科目の場合は、各学年での配当ではなく、1年から4年までいつでも受けられることになっていて、いわゆるくさび形で専門教育と教養教育とが設計されているということです(図1)。もちろん、1年次にとったほうがイイってような教養教育科目もあるけれど、3年生や4年生でも学部の授業や卒業研究とともにとってほしいようにも思っています。本学ではそのように設計されているので、学年を問わず教養教育科目は取ってほしいなと思ってます。だからナンバリングはしにくいわけで、本学の教養教育科目では3桁目は「9」というのを提案しています。基礎、

応用、発展というような科目の体系ではなくて、教養の科目はどのレベルで受けても、その科目の内容を理解できるようにしてあるということです。

ブ) 履修要件とか履修条件というような、ある科目を取るためには事前に特定の科目を履修していなければならないというようなのもあっていいと思いますね。

こ) 聞いていて思ったんですが、日本の大学の場合、特に本学の場合で言うと、学生たちは教養教育については、好きな科目をとってるんですよね。例えば、文学をとりたければそれをとる。さっきおっしゃっていたようないくつかの中からとりなさいということではなくて、自分のとりたい科目を取れるということです。僕が大学の頃の教養教育も基本的に同じで、大まかなカテゴリ区分はあったものの、何か決まったコースとか履修要件をクリアしていくのではなくて、シラバスをみてとりたい科目を取る、という感じでした。その一方で、リベラルアーツなのだから特定の科目や領域を大学が指示してくる場合もあるということです。実はそっちの方が効果的なのかもしれないけれども、どうでしょうか、どちらがイイ方法なんでしょうか?

2.2 教養教育と外国語

ブ) もっと深い知識を身につけるためには、メニューから好きなものを食べるのではなくて、例えば、外国語の場合は数年間続けて勉強しないとなかなか話せるところまではならないですね。私も大学ではフランス語を勉強したんですが、やっぱりちゃんとしたレベルがあって、つまり、1年次、2年次、3年次というふうにそれぞれちゃんとしたプログラムがあって、それを通してることによって話せるようになったんですよね。まあ、ふつうは、大学で習って外国語を話せるようにはならないんですよね。それに関してちゃんとプログラムをつくる大学は少ないんですよ

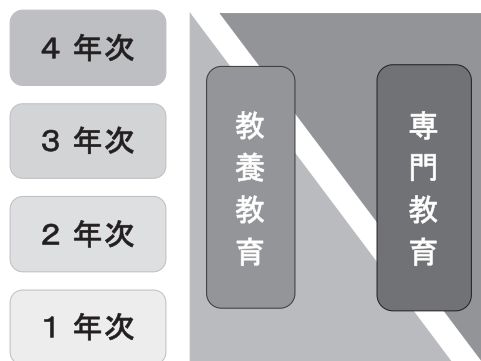


図1 本学における教養教育と専門教育のくさび形教育

ね, バラバラすぎだというか。ほとんど実際に話せるようにはならないですね。

こ) いまのは重要な指摘で, ふつう大学の授業だけで外国語を完璧に使いこなせるようには, ならない, ですね。実は僕も中国語は大学で履修したわけではないんです。個人的に先生を見つけて, という感じです。あとは向こうに長く滞在したり, 国際結婚したり...。で, なんとか身につけてきた。大学のときは英語とドイツ語の科目をとってましたが, ドイツ語の方はほとんどわからなくて, ちょっと読めるけどあとは挨拶くらいしかできない。まあ, それは別の論点でもあるけれど...。勉強の密度の問題ですかね。

さ) クラッスン先生は日本語をどうやって勉強したんですか?

ク) たしかに, 大学でたくさんの授業を受けましたが, それでも, 水の泡... (笑)。

全) (笑)

ク) フランス語を勉強したほうがイイかな (笑)。

さ) どのくらい勉強の時間はあったんですか?

ク) まあ, 留学もしたので, 2年生までちゃんと授業があって, でも留学したので, 2年生は勉強しなかった。で, 卒業してまた日本に来て, 福井県で仕事をして, ずっと自習をしてましたね。でも, あまり話すことは上手じゃないんですけど, 学生の頃は, 書くのと読むのとは上手でした。今はあ, なんも上手じゃない...。

全) (笑)

ク) ほとんど話す必要がなくなったので, 英語しか話さないようになってます。むなし, ですね。

さ) 謙遜が多すぎますよー (笑)。

ブ) 大学生にとっては, 上手になりたいための道があればイイと思いますね。例えば, ここでフランス語を話せるようになりたいなら, そういうようなもっと上位のコースも

あった方がいいですね。

さ) 日本の場合は, 第二外国語というのは, 言語の習得というよりもむしろその言語の背景にある文化であるとかその国の歴史であるとかあるいはその国の文学であるとか, そういったものを通じて, あるいはそれらに親しむというような感じですね, 本来はね...。

ブ) 私もフランス語の場合, 1年生と2年生では, 文化を勉強しながら言語を学ぶという感じでした。いわば, 学問への導入とか紹介とかでしたが, 3年生からスキルを上達させるために発音の練習とか作文とかがありました。

さ) だから, 日本の場合は, 先生たちがおっしゃったような1年生での勉強のようので終わりということで, それより上のコースは実際には無いということです。チャンスもほとんど無いでしょうね。

こ) 大きな大学では英語以外の語学のインテンスイブコース, 本気でやりたい人は受け入れます, というようなコースが設定されているところもありますが, あれば組織が大きいからこそできることでもありますね。

2.3. Independent Studyをつくる

ク) 人文学部のある先生とお話ししたときにも independent studyのコースが作れないというのは問題になるんじゃないかとおっしゃってました。特定の分野に関する, 例えば, その先生の場合だと特定の地域の歴史に関するような一人か二人のコースを作りたくてもできないということだったので, そのようなコースが作れたらいいなと思います。卒業論文についてだと特にですね。学生が専門的なことを勉強したいというときに, その分野の先生が読み書きを教えるというような割り当てを作るチャンスがあるといいと思います。

ブ) 担当の先生と学生とでそのコースの内容を考えて設計するようなことですね。

ク) Custom fitですね。

こ) 大学によっては, 「特殊講義」という名前

のカテゴリの授業がありますね。シラバスなんかも割とアバウトに作ってあって、例えば言語学特殊講義というような名前で、そこに来る学生たちというのは、その分野の専門的なことをやるわけだし、今年はこれこれをやりたいというように初回の講義で話し合うとか、ですね。本学の教養教育科目だと「課題演習」とか「複合領域科目」とかですかね。で、ふつうのレクチャーでもセミナーでもないような自由に設定したコースをできるという。

さ) でも、クラッソン先生がおっしゃったのは、一人とか二人とかの受講生のイメージでしよう?一対一とかね。

ク) 私も4年生のときに日本文学のコースを先生と学生二人とでやりました。

ブ) たしか、私のいた大学では、1年生のときでも、田舎にあった大学だったのでフランス語のコースは無かったですよ。テキサス州だったからスペイン語が優先されていね。でも、スペイン語には興味が無かったですね。私としてはもうフランス語じゃないとダメってなりましたから、大学の学長にまで言って、開講してくれないかということで、スペイン語の先生がindependent studyでフランス語を私に教えてくれたんです。私はスペイン語の科目をとって、授業では私は廊下に座ってて、フランス語の教科書を使っていたんですよ。先生が時々廊下に出て、というふうにご自分でしてくれましたね。私のフランス語はそこからスタートだったんですよ。要はモチベーションのある学生に対してどのように対応していくかということですね。

こ) そのindependent studyでも単位は出るんですか?

ブ) はい、つきますね。もちろん、評価の仕方とかも考えなくてはいけませんね。だから、担当する先生はちょっとたいへんだけれど、制度や先生の手当も含めて考える必要が

ありますけれどね。

さ) 日本の場合はそれはムリですね。例えば、さっき出てたような特殊講義のようなところで行うということであれば可能だけれども、そもそも一対一は無いし...

ク) 5人以上履修者がいないと開講できないとかいう制度になっている大学もありますよね。

さ) うん、そう、それもありますね。それに、そもそも、名前の違う科目で内容の異なることができないようになってますからね...

ブ) イリノイCollegeの場合は、担当の先生の専門分野を自分で責任として勉強させるということがありますね。だからそれはリベラルアーツ的ですね。

さ) そういうのがシステムとしてあるのはいいですね。

こ) やっぱり日本でいうところの特殊講義が一番近いかな。特殊講義に10人も来るようなことはないですからね。しかもその担当の先生の専門に一番近いことをやるという意味でも当てはまるかなと思います。

むしろ、今の話を聞いていて思ったのは、例えば、文学部の仏教学の特殊講義だったら、先生が研究している一番専門的なところに関心のある学生がやってきて、原典や最新の論文を読んで、自分の論文などもそれに近い内容について書くというような感じですね。そういう内容であれば今の日本の大学の制度の中でも組立はできるかなと思います。

さ) そうね、だから、すんごくintensiveだっということを書いたら、そんな何十人もやってくるというようなことはないから、そういう科目の設定は実はあってもいいのかもしれないですね。教養教育の方からそういうのは提案していてもいいかもしれないですね。もともとこの大学のさっき小西先生もおっしゃった「課題演習」とか「複合領域科目」のようなのはほんとはもうちょっ

と継続してもイイのかもしれないですね。

ただ、こういう話になるといつも問題となるのは、学生対教員の比率、つまりST比ですね。日本の場合はその比率がとても大きいわけです。

ブ) 小さな college の場合は特別なんですが、でっかい州立大学とかでは、300人規模の授業なんかもあるところはあります。

ク) Lecture の場合ですね。言語系は20人くらいがふつうですけどね。

さ) うん、だから、でかい授業もあるということですね。ただ、日本の場合、おそらく小さな大学のほうが大きな大学よりもこういった問題は抱えていると思いますね。経済学部なんかでもゼミの先生たちはたいへんだなというのはよく理解できますよね。逆に言えば、この規模の私立大学であれほどの少人数でやれてる学部が二つもあるというのは、いろんな意味ですごいことだと思います。国立大学でもこれほどの少人数教育は少ないんじゃないかと思うし、経済学部でさえ分野でいえば国立大並みと言えなくもないです。大きな私立の総合大学だと法経商それぞれで一学年900人程度の定員のところもあるし、その専任教員はと言えば、たかだか60人足らずですから、本学の経済学部の比ではないわけです。留学だって全員行かされてるわけですから、すごいなと、逆にボクなんかは思いますよ。一学年60人ほぼ全員がIELTS 5.5まではクリアできるところまで持っていくわけですからね。まあ、いずれにしても、人数の問題というのは日本の大学では避けられない問題として存在するということがあげられますね。

ブ) だから、ディスカッション中心の授業というのもできないですよ。

さ) おそらく、ココまでのお話というのは、本学でいえば「専門ゼミナール」ということになるんじゃないかと思います。そのなかで

教員がうまくやりくりする、というのが現状では最適解ではないでしょうか。

2.4. 総合的な見方と教養

ブ) アメリカの場合はいろんな大学が増えているから、例えば、オンラインでの教育の大学もあるし、大人たちも行ってる大学もあるし、いろんなパタンの大学がありますね。授業で隣に80歳の人が座ってる可能性だって高いですよ。

こ) 日本の場合だと大学は人生のなかの一つのステージという感じで、卒業するというのは通過儀礼のようなもので、それ以上の意味はあまり与えられない感じがします。

ブ) だから合格しやすいわけですね、次のステージに進むためにもね。

こ) だから日本の大学で求められるのは、就職のためのスキルであるとか、それこそTOEICの点数を取ることにどうしてもなってしまう場合がある。なにか自分の履歴書に書けるようなスキルを得て卒業してくださいというような教育方針にどうしてもなってしまうのかもしれない。

ブ) ディベートなどの就職に必要なスキルや教養のある人となるためのハードスキルとソフトスキル⁽³⁾ですね。

ク) ビジネスでは訓練したくないし、そういうスキルはcollegeに任せてるというような問題も実はあります。Companies don't want to spend time educating students!!

さ) ということは、その傾向は日本もアメリカも同じということか...。経済活動への参加を基本とする、というようなことか...。もっと文化活動とか社会活動とか世界の人間の活動っていうのはもっといろいろあっていいと思うんだけど、経済活動というところのボリュームがものすごく大きいわけですね。

ブ) 労働者を育てるとのことかな。

こ) 労働者というか「優秀な」ビジネスマンを育てるにはどうすればイイかというような

ことでしょうかね。

全) (笑)

ブ) よく国際化とかグローバル化というようなことを言うんですが、最近の政治的な動きは、国家中心主義というか *antiglobal* というか、その流れはしばらくあって、また戻ってくるというようなこともある。私たちはできればもうちょっとグローバル的な考え方もサポートしていきたいと思います。

さ) それと、長い時間のスパンをわれわれももつということですね。まあ、波とか揺れということも、大きく見ると波じゃないということも認識しながらね。

全) そう、そう。

さ) 波ではなく、そういうような大きな太い線であるというね。こういう感じやね (図2)。細かな波の集まりが大きな目で見てみるとただのうねりのようなのを構成しているだけということもあるし、むしろそのうねりのほうを見ることのほうが重要であるかもしれない。要するに、波と見えるのはただの小さなフェイズであって、そのフェイズをいちいち追いかけていくのは頭がイイとは言えないわけですよ。

ク) 成長の痛みというの必要だし...

さ) そういうのも含めて *buffering* しながらみんなへの教育に携わりたいというふうに大学の先生たちは思っているはずなんだろうけれども、でも、これってあれですかね、われわれは教養教育部というような名前のところに所属しているから、しかもこの4人とも教育という観点でかなり馴染みがあるというか親和性が高いでしょ。ところが...、ねえ...

—中略—

さ) やっぱ、その、人間とか文化とかっていうのがメインじゃなくてねっていう人たちは確かにいますよ。

ブ) ということは、さっきおっしゃった「複合領域科目」のようなのを担当できる教員がいるほうがイイということですね。イリノイ college でも同じようなことがありました。大学の *philosophy* としては、各学部間のことを超えていきたいと思いますというのがありました。例えば、私の知っている化学の先生は、ご自分の研究室に日本語での用語の表示や解説をされたり、日本語を専攻している学生とお話しされたりしていました。在外で金沢まで来て、しかも日本語や日本の文化は専門じゃないのに学ぼうとされていて、総合的な人間になりたいあるいは日本語を身につけたいということで、しかも大学もサポートしてくれてたんですね。そういうようなこともこれからは必要になってくるんじゃないですかね。

さ) だから、一人の人の中で *multiple* になるというか...

ブ) そういうような教員がいないとね。

ク) *Renaissance Man!*? 日本語だと万能人間!?

さ) 日本だと総合的人間って言うことがあるかな。

こ) ちなみに僕は総合人間学部の卒業なんですよ。

さ) ちなみにボクは総合科学部の卒業なんですよ。

ブ) 私も同じようなのです。Central Texas College では、General Studies という総合的なプログラム、大学では、Faculty of Humanities

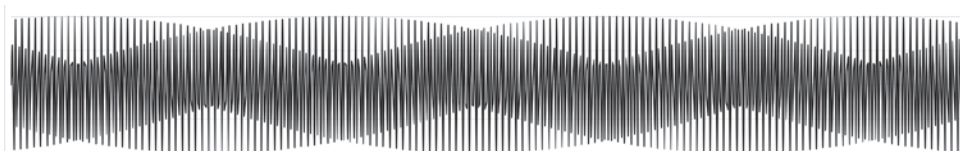


図2 細かな波と波の集まりが大きなうねりとして見えることがある

にある Distributed Studies (English, French, History) という multidisciplinary, つまり複合的なコースを選んだのです。

さ) だから, 学部で総合なんちゃらとか教養なんちゃらのようなところを出てきておられる場合は, お話をするとほとんど違和感なくお話することができます。総合情報学部というところを卒業された本学のある非常勤講師の先生ともよく研究室で二人FDをやりますが, 最初っから話の論点や議論のかみ合い方がとてもいいですね。

ブ) そうそうそう。

さ) ところが, それぞれの専門の学部を出ておられると, やや話が, ね…。

ブ) (笑) それはたしかにそうですね。

さ) そこがなんかちょっとこう, なんていうか本来のグローバルっていう意味はね, 人間一人ひとりがそれぞれで総合的になるとか, それを教養という言葉で言い換えてもイイのかもしれないけれども, まあ, マルチな人というのが少なからず必要というように思います。

ブ) それは, 大学の場合, どうしても業績ということが必要で, そのためには, 専門的なことが優先されていきますよね。でも, 総合的なことは業績になりにくいわけです。

さ) うん, 書きにくいですよ。だから, この対談シリーズなんかも紀要に載せてますが, 紀要であるからこそ載せやすいということもありますよね。大学人としての自由な本来の活動が表現できる場でもあるわけですよ

ね。この対談シリーズなんかもとても自由な感じでやっているからいいなと思いますが, ちょっと専門化が進みすぎている部分が分野によってはあるような気がしてなりません。

こ) うんうんうん。

さ) だからもうちょっと総合的な人をつくるというか, そういう人になってほしいということは, われわれは考えているところがかかなりありますね。

3. 大学の philosophy と教養教育のあり方

3.1. コアカリキュラムの必要性

こ) 佐々木先生と前にお話ししたことでもありますが, さっきブローダウェイ先生のお話に出た学部を超えた大学の philosophy を学生たちに伝えるような授業があっているんじゃないかっていうのがあります。ちょっと調べてみたんですが, コロンビア大学ではコアカリキュラムというのがあって, すべての学生がそれを受ける。要するに全学生にその大学の教育の哲学を与えるという意味での共通科目ですね。そういうのが最初に設置されているというのはすごくいいなと思います。

こんな感じのコアなのですね (表1)。

ブ) 娘が取ったプログラムを見るとそのようになりべラルアーツのような広い目で見た基礎的なものがありますね。中心的なのはディベートで, 人間としての経験や人間についての疑問に関してディベートとかやって, ある community college⁽⁵⁾ではそのコミュニティの

表1 コロンビア大学のコアカリキュラム構成⁽⁴⁾

コース名	内容
Literature Humanities	ギリシア・ローマから近代までの西洋古典文学を読む
Contemporary Civilization	現代を生きる能動的で知識を持った市民に必要な, 社会, 政治, 倫理, 宗教に関する文献を読む
University Writing	大学に必要なアカデミックリーディングとライティング
Art Humanities	各時代の西洋芸術 (建築, 彫刻, 絵画など) を題材に芸術への学術的視点を養う。学外実習あり
Music Humanities	各時代の西洋音楽の多様な形を理解する
Frontiers of Science	科学の最先端の知見を理解する

メンバになるための人文的な目標が設定されていることがありますね。

さ) これって1科目?

ブ) いっぱいありますね。

さ) コアカリキュラム群ってこと?

ブ) どんな専門の人たちでも必修ですね。ほんとに教養です。

さ) 金沢大学がGS科目(表2)というのをつくっているけれど、アレはおそらく今の話聞いてみると、選択必修というか、コースの中からとるといようなのとたぶんおんなじような考え方もしれませんね。5つのStandard(基準)のなかに6つずつ科目があって、そのうちの3科目以上をとれば、

そのStandardが身につくという設計になっているようです。5つの基準を眺めてみると、時間、空間、自己、そして考えることと表現することということが入れられているように見えます。これらの基準それぞれに科目が設定されているので、5基準×6科目=30科目用意されているということになりますね。それらで教養教育というか総合共通系の科目ということになっています。お二人がおっしゃったようなアメリカでの教養教育、まあリベラルアーツのコアカリキュラムようなのと似た設計になっているように思います。

ク) 質問ですが、日本の大学の場合、数学の科目は一つも取らなくても卒業できるんです

表2 金沢大学のGS科目の構成⁽⁶⁾

基準 (Standard)	科目
1. 自己の立ち位置を知る	1. 現代社会への歴史学的アプローチ 2. グローバル時代の政治経済学 3. グローバル時代の社会学 4. ケーススタディによる応用倫理学 5. 地球生物圏と人間 6. 物理の世界/化学の世界
2. 自己を知り、自己を鍛える	1. 哲学(自我論) 2. パーソナリティ心理学 3. グローバル時代の文学 4. 健康科学 5. 細胞・分子生物学 6. エクササイズ&スポーツ実技
3. 考え・価値観を表現する	1. プレゼン・ディベート論(初学者ゼミⅡ) 2. クリティカル・シンキング 3. 価値と情動の認知科学 4. 論理学から見る世界/数学的発想法 5. 芸術と自己表現 6. スポーツ科学
4. 世界とつながる	1. 金沢・能登と世界の地域文化 2. 日本史・日本文化 3. 異文化間コミュニケーション 4. 異文化体験 5. 国際社会とボランティア 6. グローバル社会と地域の課題
5. 未来の課題に取り組む	1. 科学技術と科学方法論 2. 統計学から未来を見る 3. 情報の科学 4. 環境学とESD 5. 生活と社会保障 6. 人権・ジェンダー論

よね。歴史も取らなくても卒業できるんですよね。

こ) 日本の大半の大学はそうですね。

ク) 英語だけは必修だけれども、ということですね。そうか、やっぱり、コアカリキュラムっていうのが、そのくらいになってるんですね。

さ) うん、だから、ほんとは大学生なら受けてるはずだろうっていう科目でさえ受けてない大学生はたくさんいることになります。本学は文系の大学ということもあるけれど、自然科学系の教養教育科目を取る学生は少なめだと思います。

ブ) ということは、とりやすい科目を取っていったるとも言えますね。

ク) まあ、でも、それは、本学のメリットにもなるのではないかと考えてます。私が考えたのは、アメリカのように1年生はフルコースを取るんですね、例えば、数学、歴史、文学...、というように。それから2年生から専攻に注目して、でもESPのほうは1年から英語中心ですね。で、留学して帰ってきてからフルコースということになるんでしょうかね。なんか順番が逆という感じがするのですが...。ふつうは3年生で留学しますが、ここでは1年生で留学しますね。フルコースを取ってないということは、全然知りませんでした。

こ) そう、フルコースをどのタイミングで与えるかは、カリキュラム編成の重要なところですね。基本的に日本の大学の教養教育関連科目は分野や領域ごとに設定されてはいるものの、各科目がバラバラに存在していると言っていいですね。そこをもっとコアカリキュラムのようにして、例えば、人文科学とか社会科学だったりというような広くくりでの授業、あるいはそういった群をつくったほうが、フルコースはつくりやすいと言えますね。懐石料理とは違って、刺身なら刺身だけ食べてれば合格できるとか、いやこれはこ

ういう定食なのだから味噌汁も小鉢も食べてくださいよというように規定できるかどうかですね。

ク) おなかすいたのでフルコースにしてくださいとかね。

こ) 刺身しかつけれない先生も、その定食をつくるために一緒に他の先生とつくりましたよということをやらないといけないかもしれない。どっちがいいのかな。僕の感じだと、簡単な定食でイイから、学部を越えた共通のものをどこかのタイミングで提供したほうがいいかなあ。なぜかという、例えば、人文科学部の学生たちは留学先でディスカッションについていけないということがあつたようで、それは英語の問題というよりもむしろ話されているトピックそのものが理解できないという、そのための予備知識がないという問題がすごく多く発生しているようです。それはみんなそれだけの内容を受ける時間が1年次になつたからであつて、それをなんとかフォローするということはできないかと思つています。それはもちろんそれぞれの先生たちがvoluntaryに努力することはできるけれども、どこかのタイミングでそのようなパッケージが提供できればいいなと常々思つてます。

3.2. 共通語としての教養を育む—教養のなかで発見する機会をつくる—

ブ) なんかこう、人間としての共通の知識があるかどうか、あるいはあつたほうがイイかどうか、というようなことは疑問です。例えば、地理ですね。学生たちはみんな知らないっていうから文句言うんですが、人間としてどの国でも共通となる知識ですね、同じ地球に住んでいるのだから、地理というのは大切であるように思つています。数学だつてどの国でも共通語になりますよね。そう、だから、さっきの定食の中身を決めるのはチャレンジですね。

さ) でもね、例えば数学でいえば、高校まで

の大学受験のための数学がメインになっていて、数学の本質的な勉強ができる機会っていうのは、少ないと思います。幾何とか代数とか解析とかっていても、代数だと行列の計算をさんざんさせられるとか、少なくともボクが受けた大学の数学の授業はそうだったから、なんにもおもしろくなかった。でもお、例えば、行列のマトリクスをコンピュータグラフィクスにどのように応用できるのかとか、折り紙を使って幾何と解析の勉強ができるとか、身近にあるものと合わせて数学の勉強ができる、あるいは学ばせてくれるというような先生がいるんだったらいいなと思うんです。英語も高校のときの授業の内容の延長のようなのになってるのと同じように、高校のときの数学の延長のようになってしまおうとね、まったく違った数学というような感覚は少なくとも大学では受けなかったのですね。小西先生は数学は受けましたか？

こ) 受けましたね。でも全然わからなかった。

さ) あ、難しすぎたん？

こ) 難しかったですね。文系向け、とシラバスにあったのですが全然わかんなかったから、自分でいろいろ調べて、数学と占星術と日本の和算についてレポート書いたら通りました(笑)。でも、それは勝手にやっただけなので...

さ) 放送大学なんかがやってる数学は、もちろん微積とか線形代数の入門もあって、専門基礎的な内容の科目もあるけれど、例えば今出てきた和算とか数を数えるということとか...

こ) 算術ってやつですね。

さ) ...そうそう、算術。それからグラフ理論とか、集合論とか、基本的な数学の概念ってたくさんあると思うんですけど、そういうことをざっくり教えてくれたら数学的なもの見方とか数学的な概念の使い方とか知れて嬉しいのに、なんかものすごく細かな証明とか、細かな計算式の展開とかね⁽⁷⁾、そんなん

やらされてもボくらにとってはほとんど意味はなくてね。

ブ) アメリカの場合は、科学の道を歩んでる人には難しい数学が課されますが、でも、リベラルアーツや人文のようなコースを取っている学生は、数学自体について考えるようなとか、統計を理解するようなこととか、一般の人が理解できる、そして利用するような人たちのための数学のコースが多いです。娘が取った数学のコースだと、応用統計です。

こ) ちなみにさっきでてきたコアカリキュラムについては、Frontiers of scienceとなっていて、科学と天文学の先生が担当していて、科学的な思考とか最新の科学の動向みたいなのをやってる感じですね。

さ) だから、それこそ、『日経サイエンス』なんかは『Scientific American』の日本語訳だから、こういう一般誌のレベルにあるような科学誌なんかを題材にして大学の授業をやってくれればいいのに、専門書に書かれているようなことを教養教育でいくらやってもね。

ブ) あまり意味はないですよ。

こ) 『Scientific American』のような記事を7割8割理解して、それについてディスカッションするというようなのについていけるくらいの知識を得るほうがいいのかもかもしれない。

さ) それが、さっきブローダウェイ先生がおっしゃったような世界のみみんなが知っていいよねっていうようなレベルの共通語としての教養のことなんでしょうね。

ブ) それで自分の意見を言っていけるようなスキルを身につけてっていうことになりすね。

さ) まあわれわれのような教養教育の立場にいると、わりとみんなでざっくりとというように話ができますが、学部の先生方だとまた違った細かなところへの目の向き方というのもあるでしょうね。ただね、前にもどこかでお話ししましたが、もし、ボクが、心理学の

プロパーとして心理学科のようなところに1年目から着任していたとしたら、ボクもこんなにはいろいろと多様にあるいは総合的に考えようというふうにはなっていなかったかもしれません。その学部や学科に特化した専門領域、特にボクの場合だったら認知科学とか認知心理学とかあるいははもともと大学院でやってた生理心理学とか、さらにその扱うテーマも記憶とか学習とか、あるいは脳のある特定の部位の機能とかっていうふうなすごく狭い範囲のところをずっとやっているかもしれません。しかも、いつも言ってるような、そうした専門分野「で」教えるなんていう応用的な教え方⁽⁸⁾にはならず、単にそれら「を」教えるだけっていうようになってたかもしれません。そのくらいにまで細かく落とし込んでしまっているかもです。もしかしたらブラックホールのようなところに落ち込んでしまっていたかもしれません。そういう状態に今の大学の人たちはなっている可能性はあるんじゃないかとも思います。よく言われる蛸壺化ですね。基礎ゼミなんかのいろいろなことをいま教養教育部でも検討しているのは、こういった状況を少しでも幅広く、あるいは多様にできたらいいなと思ってやってるわけです。

ブ) 大学のポリシーとしては、どのような人材をつくりたいか、ですね。建学の精神にもありますよね。

こ) 「誠実にして社会に役立つ人間の育成」⁽⁹⁾、ですね。でもコレがまた解釈が難しいです。僕はこの「社会に役立つ」という部分を最大限拡大解釈したいところです。この大学はもともとは珠算簿記学校からスタートしたので、本当にビジネスに必要なスキルを教えるっていうことが最初の最初にはあったと思うんです。それをわれわれがどこまで広げていけるのかってということだと思うので、逆に教養の側から実はビジネススキル以上に重要である

ことを提案していくべきだという立場なのかもしれませんが、どうでしょうか、部長?⁽¹⁰⁾
さ) (笑) それはもちろんそう思います。それは堅持していきたいところです。さっきブロードウェイ先生がおっしゃった人間としての共通の知識というか教養というかそういうのを持ち合わせて社会に出て行かないと、「社会で役立つ」というふうにはならないんじゃないかと思います。「役立つ」というのは、自分が社会に使ってもらわなくなると、社会の中で自分から発信したり表現したり創造したりできるっていうことじゃないかと思います。さらに言えば、社会から表現されたことを受けとめて咀嚼できなくてはいけないわけですからね。そのためにはそのための教養が必要で、ボクに言わせると教養と言うよりも「教養力」というチカラだと思うんですよ。だから、教養を身につけるチカラもそうだし、教養を知るチカラもそうだし、教養で考えるチカラもそうだけど、そういうのを合わせて「教養力」と呼びたいとボクは思ってます。

ブ) そして、教養の中で発見するチカラも必要ですね。自分の世界の中で知らないことに直面して、こういうこともあるんだ、というようなチャンスをみんなに与えたいですね。

私も大学でいろんな分野を勉強しました。もともとは数学だったんですよ。で、英語のコースを取ってシェイクスピアを発見しました。これはすごいなあとね。だんだんと興味を持って行って、まったく知らないことを発見したと思いました。

さ) むかし、ボクが小学校か中学校の頃に、NHK教育テレビで月一くらいか半年に一回くらいのペースで「シェイクスピア劇場」⁽¹¹⁾⁽¹²⁾っていうのをやってたんですよ。イギリスのBBCがつくったのに翻訳を当ててね。一本当たり3時間くらいの長いドラマでね。スタジオでの撮影か何かだったと思いますが、すご

くイギリスの風景とか雰囲気とか文化的な感じなんかリアルに感じられてね。もちろん、英語は聞き取れないからボクはずうーっと字幕を追ってるわけですけどね（笑）。

全）（笑）

さ） ああそうかこれがかの有名な「to be or not to be」かとかね（笑）。まあああいうの、もう一回やってくれないかなって思ってるんですけどね。もちろん、シェークスピアを本で読んだことは一度もないんですけどね（笑）。久しぶりに思い出しましたっ！

こ） そういうのは少なくともわれわれの世代くらいまでは、人間として共通のとかある種の共通語としての教養の一つとして捉えられてきたと思います。なにか文学作品の、何がどこにどう書いてあるというようなことまでは理解できなくても、だいたいの背景とかどういうストーリーかというようなことは、知らない人同士でこの話題が始まったときにはそこに参加できるかどうかというか、そこになんというか役に就けるといって...、「役立つ」のことをずっと考えてたんですが、いわゆる使役の意味での役立つというのが日本語としてはありますよね。使う使われるという意味でね。つまり、ともすれば、役立つスキルというのは、いいように使われるだけのスキルかもしれない。つまり、労働者として使役されやすいようなスキルという意味にとどまるんじゃないかとかね。そうではなくて、どんなところでも自分の役割を見つけることができるような力が必要じゃないか。そのためには、さっきブローダウェイ先生がおっしゃった共通語としての教養というのはすごく重要な概念だだと思います。それが教養のチカラというのにつながっているのかなあと思います。

さ） 「役」、の話は、短大に所属していたときに当時の副学長⁽¹³⁾が学生たちによく言っておられましたね。「役」、つまり役割を社会の

中でもてるかどうか、そしてその役を毎日毎日いろんな場所でいろんな役割として演じているとね。それが演じられないようではダメで、演じられるような学びをこの短大の2年間でしようと言っておられましたね。

—中略—

4. 教養教育の方法論

4.1. ICTとソフトウェアの利活用

こ） このあたりから方法論の話に入っていますが、実際の現場でどのようなことをやっていくかということについて、先生方、コレはホントにいい方法だと思われるようなのってありますか？これまでに導入されてきたこととか、あるいは細かなテクニックのようなことでもいいんですが、言葉を学ぶにしても教養を学ぶにしても、どういう効果を上げたのかというようなことについて、どうでしょうか？

ク） まあそうねえ、私はspeakingとwritingの専門ですので、その中で、例えば、CMC、つまり、Computer Mediated CommunicationということでVoice Thread⁽¹⁴⁾というのを使っています。学生同士が会話を録音して、IELTS⁽¹⁵⁾のインタビュアーとインタビュイーをして、その会話を録音したファイルから成績をつけるということをしてます。これはIELTSの準備のためのものですが、実際に話すということを重要視してます。できるだけauthentic Englishとauthentic activityをやってほしいですね。

さ） これ、録音してやり合うのは何でやるんですか？

ク） 携帯です。

さ） で、お互いが聞き合うの？

ク） そうですね。

さ） 評価はどのようにするんですか？

ク） IELTSの本番と同じようにして成績つけます。

さ) 学生たちがその音声を聞くってことはあるんですか?

ク) あります。例えば、モチベーションのある学生は他の人のを聞こうとします。みんなの録音されたものは自由に聞くことができます。そのファイルは、Voice Threadに置かれていて、いつでも聞くことができます。

(VoiceThreadのデモ)

これはパデュー大学で実際のオンラインコースを教えたときに、ここにスライドを載せて、ディスカッションをさせるんですね。例えば、言語習得理論についてどう思いますかといったようにして使っていました。でも、その使い方だけだと基本部分だけでちょっともったいないので、他の使い方も考えてるところです。

こ) これは学生はどうやって自分の音声をアップロードするんですか?

ク) アプリをみんなのケータイにダウンロードしてもらってインストールして使わせます。たぶん、このWebサイト⁽¹⁶⁾に直接いけるとおもいますから、そのままブラウザからでも使えると思います。でも、アプリケーションのほうが使いやすいと思います。

こ) じゃあ学生はみんなケータイを使って録音したりファイルのアップロードをしたりするわけですね。

ク) もちろんケータイじゃなくってパソコンから録音して使ってもいいですね。情報演習室も使えばいいですね。いろんな使い道があります。

こ) すばらしい。

ク) ある先生から聞いたんですが、コンペがしたい人は他の学生のも聞いているようですが、レベルが達していない学生は聞かないようです。でも、その機会を与えるためにこのようなやり方を取ってるわけですね。もちろんプライベートな返事もできるようになっています。それは他の人があまり聞かないことに

なるので、使わないでくださいというふうには言ってます。

ブ) シャイな学生にとってはこういうツールはイイと思いますね。

ク) そうですね。

ブ) 私の場合は教室で発表してもらいますが、それはなぜかという、音声だけじゃなくって、ジェスチャーとか握手とかも全部含めて見せてほしいからです。そして、教室でお互いに話すということに慣れてほしいからです。でも、シャイな学生にとってみるとこっちのほうが楽だと思いますね。私もすごい興味がありますので、宿題として先に提出してもらって、その後、教室で発表してもらって、っていうふうにしますが、時間はかかりますね、人数が多いとね。

ク) 授業中のディスカッションは留学する学生たちのためにも大切だと思っています。第1クォータ(1Q)と2QはIELTSのために必死で勉強するようですが、3Qと4Qはもっと留学っぽいこと、留学に備えたディスカッションなどをやるほうがいいですね。

ブ) 私もクラッスン先生と同じように、ICTを使って授業をサポートしてマネジメントしたり、もっと難しいレベルの高い課題をできるようにしたいですね。準備したり予習したりさせるには必要です。

ク) Voice Threadよりも良いツールもあるようで、実際に使ったこともあるんですが、最近ではアップデートされてなくて、ちょっと使いづらいというものもあります。

ブ) Moodleだったらこういうのも入ってますね。

さ) クラッスン先生もMoodleは使ったことあるんですか?

ク) あります。少しだけの期間でしたが、簡単でしたね。

ブ) でも、Voice Threadほどには使いやすくないかもしれませんね。アップロードとか

簡単なんですか？

- ク) 学生たちには使いやすいと思います。
- ブ) 先生側からは、一つ一つ見て、あるいは聞いて、また一つ一つ成績を別のファイルにつけていかなくちやなんないですね。
- ク) dotCampus⁽¹⁷⁾はこの問題も抱えています、前に使ったレッスンをコピーするのが難しいということもあります。

ブ) ああそうか。

さ) これは何人のクラスですか？

ク) このサイトは100人程度までは使えますが、実際今のクラスは20人程度ですね。

さ) 20人程度ならこのサイトで使えそうですが、40人くらいになるとちょっとたいへんじゃないですか？

ク) いえ、わりとできますよ。成績つける時間が増えるだけ、という感じです。

さ) そか、単に量というか数が増えるだけで、採点上、操作上の質的な問題が増えるというわけではないんですね。

ブ) 違うソフトを使って成績つけることになるという点だけがマネジメントの難しさにつながります。なぜなら、成績をつけるときに間違えやすくなる可能性が高くなるからです。

4.2. クラスサイズと受講生の同定

さ) いや、さっき人数のことを聞いたのはね、20人程度なら、学生たちのことをたいがいは一対一で覚えているからいいんですが、40人以上になると同定するのがちょっと難しくなるでしょ？

ク) そうそう、だから、録音を始める前には必ず名前を言ってから始めるように指示しています。

さ) うん、そこのルールをね、キチンとさせるのがたいへんなんですね。100人以上の授業なんかでもね、ほんとに全員特定したいんですよ。昔はできたんですが、最近では老化でしょうか(笑)、なかなか覚えにくくなってきてるので、不安な感じになることがあります。

ます。前の大学にいたときはね、その学科の一学年が100人程度だったから、しかも専門基礎科目の担当が多くてその100人が自分の担当授業を何度も受けに来ることが多いので、ずっと同じメンバを見てることになって、わりと人数が多くても覚えられるですよ。でも、教養の科目だと入れ替わり立ち替わり学年も違えば人数も違えばいろいろ変数になる部分が多くて、全員を覚えるというのはなかなか至難の業という気がしています。まあ、それでも、授業の最後のほうになるとレポートとか課題提出とかのクセが見えてきて覚えられるようにはなっていますけどね。まあ、そのあたりが今自分にとっては一番苦しいところですね。

ブ) これね、教務課さんにお問い合わせでもあるんですが、dotCampusのコースメンバに写真を貼り付けてくれるようにしてもらえるといいんですよ。それと、氏名も漢字だけでなくひらがなかカタカナの振り仮名とローマ字表記とを併記してもらえるといいんですけどね。たとえ日本人の教員であっても漢字だけだと発音しにくいのもあったりするでしょ。

こ) 特に石川県は珍しい名字がたくさんあるので、読めないのがわりとあつたりしますね。

さ) 実はね、振り仮名の問題やローマ字の問題はすでに提案済みなんですけど、却下されちゃったという経緯があります。まあ、でも、もう一度再提案してみましようかね。名簿順もね、ローマ字にするとアルファベット順になるので、小中高までのアイウエオ順に慣れてるとbとかdから始まるような「ば」とか「ど」というようなのだと学籍番号が若くなるということもあっておもしろいです。

ブ) 金沢学院大学ではMoodleでの表記はローマ字を使っていましたね。全部大文字のラストネームと頭文字のファーストネームというようにして、氏と名がわかるようになってました。

さ) うん, ボクもその表記がイイと思います。「情報リテラシー」もそのようにActive! Mail⁽¹⁸⁾の送信元の名前はプロフィールとして書くように指示しています。もっと先生たちが要望を出されるとイイと思うんですけどね。まあ, 教養教育部からは出していきましよう。ちなみに, 短大の場合は, ある若手事務職員が学生支援課におられたときにね, 入学式が終わったら写真付きのExcelファイルを教員に一覧してくれて, まあこれは教員はCampusPlan⁽¹⁹⁾から個別に見ることもできるわけですが, 一覧というのが実はとても重要で, 先生方はとても助かっているということが実際にあります。今後は情報戦略室⁽²⁰⁾が本学にもやっとできたので, 学生に関する情報の整理とともにおもしろいとは思っています。

こ) こういうのって, その類いの情報の一覧がいかに使えらるものであるかということについて, その機微を理解できていない人が多いということなんでしょうかね。

さ) 学生証もね, いまはふりがなすらないでしょ。アレも提案したんですが, ダメでしたからね。さっきの話と合わせて, 今年度提案することにしましょうね。

4.3. 授業でのコミュニケーションと静けさ

こ) 方法論のところでお聞きしたかったことの一つとして, シャイな学生にどのように対応するかということです。長くお住みになっているブローダウェイ先生がここの誰よりも金沢の人たちの性格に詳しいと思うので。僕と佐々木先生がよく話すのは, 僕らは関西出身なので, 関西の学生と金沢の学生はほんとに性格が違うように感じるんですが, 授業の中でどのようなコミュニケーションをすればいいのかという点について, 傾向とか対応の仕方とかっていうのをお聞かせいただければと思います。

ブ) 難しい問題ですね。私が研究プロジェクトの一環としてMoodleのフォーラムを使っ

て, アバターとニックネームで表現させて, 学生自身の個別の情報は隠しながらディスカッションに入ってもらおうというようなことをやったことがあります。

こ) なるほど, 匿名のアバターでコミュニケーションができるという環境ですね。

ブ) そうそう, それで授業でそれらを見せて, いろんなコメントをしたり, ディスカッションをしたりというようにしました。匿名にするか名前を出すかについては選択できるようにして, もっと深く会話したりディスカッションしたりしたいなら名前は重要ですよというようなことも言います。そうすると学生たちもゆっくり考える時間ができるし, 自分のアイデンティティも出すかどうかを決めることもできるし, まあ, 成果は正しく測れたかどうかわかりませんが, やり方としては一つの方法だと思っています。いずれにしても自分から教室で発言するという人が非常に少ないのは確かですね。

さ) 福井でもそうでしたか?

ク) 福井では大学では教えてませんが, 田舎の子たちだと発言しやすいタイプの子どももいるのでね。関西にいたときには関西外国語大学でしたが, 小西先生や佐々木先生と同じ感覚はありますね。発言もしやすい感じの学生が多いように思います。

こ) 学生のほうからツツ込んでくるということもありますからね。

ク) 引き出すのはこっちだととてもつらいですね。だから, Voice Threadも無理からさせるしい, グループ毎に一人を代表として意見を出させたり, 直接指名するとかね, まあ, 発言を待つというのはちょっとやめました(笑)。

さ) 関西だとそれはスムーズでしたか?

ク) うん, もうちょっとスムーズです。その当時は学生として受講してたわけですが, そう感じました。

ブ) 前にちょっとやってみたのは、心理学の先生と共同でフレッシュマンセミナーのときに、トレーニングのような活動をやってました。それは、説明する側の学生が自分の顔を見せずに隠して説明する場面でやってみると、顔を見ないでその説明を理解するというのは、顔を見ながら聞くとときと比べてどのくらい難しいかということを経験させました。もう一つやったのは、説明する側の学生に対して聞く側がフィードバックをまったくせずに、かつ顔の表情も変えないようにして聞くことにすると、説明者はどれほど説明しにくいかという経験もさせてみました。そういう環境についての理解をさせる活動でした。そういった心理学的なトレーニングを1年生に直接的に教えることがいいなと思います。ほんとに学生たちはわかってないみたいで、先生たちが理解しているかどうかの判断をするのがどんなに難しいかということですね。知識が無いからなのか恥ずかしいからなのかどれかわかんないからね。

さ) 聞こえてないからかもーとかもね。

ブ) 反応がないからね…。

こ) そうなんですよ、ほんとに…。

さ) 関西だけでなく九州方面なんかから来られた先生たちもね、まあ概して西の方から来た先生たちはね、たいがい、そういうふうにおっしゃる先生が多いように思います。何かしらの反応でもあればいいんですけどね。

全) (笑)

ク) 世の中で暮らすということについての知識というか常識としての態度がないというのは問題だなって思います。

ブ) まあ外国語の教育ということにとっては非常に難しい問題ですね。だから、心理学の先生と一緒に直接的にわからせるということをやったのは良かったかなと思います。

ク) たまにはね、日本語で自分の意見をクラスの中で言ってみてくださいというように

も言いますが、それでも発言しないですからね。

こ) そう思います。僕の印象でも、英語だから発言しないということではなくて、日本語ですら発言しないという傾向がどうしてもある。例えば、留学してきた学生は、向こうの授業を受けて帰ってくると、何も発言しないということはまったくダメだということに気づくんですが、そこで初めて必要に迫られるというか、やらないとそこではやっていけないという認識に至るんだけど、なぜか日本の大学では、大学に限らないと思うけれど、何かを言うという必要性を感じていないというか。そこまで追い詰められてないのかもしれない。文化人類学者としては文化的な背景のようなものを考えてしまうんだけど…。

4.4 チャンネルを変えて発言の機会をつくる 一言語はダンスー

さ) 一方でね、一対一でしゃべるとか、書かせたりするとね、すごくしゃべったり書いたりするんですよ。

ブ) うん、そうそう。

さ) だからね、メディアというかチャンネルをボクらが変えてあげるといって設定してあげたほうが引き出しやすくなるのかなあ、って思ったりします。だから、そういう操作をわれわれがしてあげなくちゃなんないのかもしれない。

こ) それはとても重要な視点ですね。

ブ) 今も考えてるんですけど、ビデオを作成して、私が期待している態度と声とをビデオで見せて、どのような授業を私が期待しているのかを見せるということを経験する授業でやろうかと思っています。もしかすると、そういうようなイメージが学生たちにそもそも無いかもしれないんですよ。これがほんとの授業なんですよ、っていうことを学生たちは見てないからね。

ク) 時間もかかるでしょうけどね。

- ブ) うん, だから, 教員みんなでそういうようなビデオを作成して, 外国語を学ぶにはこういうようなことが必要ですよということを見せれば, 役に立つのかもしれませんが。
- こ) さっき佐々木先生もおっしゃった「役割を演じる」というのに関連して, 外国語を話すということの何%かは, 演技できるかっていうことだと思うんです。自分のことばとはまったく違うリズムで話すから, 身振りなどカラダも含めて動かせるかということにかかっているんで, 彼らを素の状態というかまったく演技じゃない状態からアクター, アクトレスとしての土俵に上げてやる必要があると思うんです。
- ブ) それは今の私の教育のメインですよ。ディスカッションというのではなくて, 台詞を覚えて, イントネーションとリズムを覚えて, ジェスチャーも覚えて, そして教室で演技する。そして, チャレンジとしてはその演技を延長させる。つまり, 自分で最後に何か付け加えてくださいというふうなんです。ただ, まあ, 自由度があまりないし, 覚えるだけのところにとどまっているので, まだまだです。
- さ) でも, それでもいいと思いますよ。さっきのシェークスピアの話じゃないけれども, 劇作でもいいしオリジナルの台詞でもいいけど, たぶん, まったく学生たち自身のことばだけで自分のことを話すというのは日本語でも難しいということなんだから, なにか既定のものがあって, そのシナリオを覚えて, それをどのように表現するかということだけでもできたら, ○ですよ!
- ブ) うん, それはうまくいきますね。
- さ) 役を与えるとね。ほら, いつだったかのランチのときでしたかね, 二人で話しているときにブローダウェイ先生が「言語はダンス」だっておっしゃったことあったじゃないですか。アレすごくいい話だと思ったんです。それに, その役をいかに演じられるかとか, そういう役って, 日本人だからとかアメリカ人だからというのとは関係なく, なりやすいですよ。
- ブ) そうそう, 近い人になればいいわけです。
- さ) たしかにディスカッションさせるっていうのもいいかもしれないけれども, 役割を与えて演じさせるというのがね, その意味でもプレイがいいんじゃないかな。
- こ) うん, そう, それおもしろいところですよ。
- さ) クラッスン先生もいまのような感じでやらせてみたらどう?例えばさっきの例えば, 掛け合い漫才みたいなのをやらせてみるのかは?
- ク) ああ, まあ, 役割を与えてやるっていうのはたまにやっています。ちょっとこの文脈とはちがいますが, 辞書で調べる役割の人, 発表する人, サポートする人, 書記をする人というようなのでやることはあります。
- さ) うん, その授業中での役割の与え方もイイですね。
- ク) IELTSではそういうのもできますね。
- ブ) ドرامアは方法としてワルくないと思いますね。とくに金沢の学生たちにはね(笑)。
- さ) なんかちょっとした舞台をやらせるとかもイイかもです。
- ブ) うん, そうそう。
- さ) 短大のウチのゼミでね, 舞台やっつてのがいてね, 市民の団体に入ってやっつてるんですよ。まあその学生だけがね, 発言も内容も断トツですね。
- ブ) 慣れてるからですかね, 人前でっていうのに。
- さ) うん, 慣れてますね。人の前でもどんどんしゃべれる。でね, その学生が最近言うんですよ, 「先生, アタシだけがしゃべっていいのかな」, ってね(笑)。実は, 昨年度のゼミ生でもその前の年のゼミ生でも, 一番よく発言してくれる学生はね, 同じことを言う

んですよ（笑）。

全）（笑）

さ）で、そうなっちゃって、逆に最近発言が少ないときがあるんですよね。みんなに発言してもらわなくてもイイのかなあってね。いいよいいよ、って言うんですけどね。まあ、舞台やってる子でさえそんなふうに周りを見合ってるって思うくらいだからね。

ブ）身体の動きがないような、つまりずっと座って授業はやるわけなので、日頃の舞台での身体の動きのある表現とは違って、っていうのもあるのかもしれないね。

さ）そうか、んじゃあみんな立たせて授業やってみようか。

こ）うん、たしかに、そういう工夫は必要なのかもしれないね。

さ）ボクらもこうやって今日是对談という形式なので座ってテーブルを囲んでやっていますが、廊下なんかで立ちっぱなしでしゃべり始めて1時間も2時間もっていうことはよくあることでもんね。

こ）チベットのお寺では、教義を身につけるために問答（英語では Monastic Debate と呼ばれる）を行います⁽²¹⁾。これは、答える人が座っていて、問いかける側が立って行いますが、問いかけるとき、命題を示すときにパンって手を叩いてからやるんですね（図3）。

ブ）どうやるの？

ク）私にやってみて！

こ）（実演中）

...こんなふうに全身を使って議論をするというやり方ですね。

ブ）身体を使うんですね。

こ）はい、これがほんとに楽しそうなんですよ。ただ、僕はまだその内容を十分に理解し切れてないのでもどかしいんだけど、彼らはほんとに楽しそうにディスカッションするんですよ。

ブ）私の授業では、発言してもらうときは立ってもらうんですが、それも信号ですね。舞台の彼女とも同じで、立ってるだけでそれが信号となって態度が変わるわけなんですよ。

こ）（写真を見せながら具体的な説明中）

...これはすごく哲学的な議論をしているので、特別な訓練を受けないとこのベースになっている論理学は理解できないんです。これはまさにアクティブラーニングというかアクティブディスカッションですね。

ブ）アクティブラーニングって言うけれど、身体を使ってるわけではないんですよね。

こ）これね、ほんとに踊ってるみたいに見えるんです。

ブ）ほんとにダンスですね。



図3 a 問答の様子（2006年11月，中国，四川省松潘県。小西賢吾撮影）



図3 b 問答の様子（2013年2月，インド，ヒマールチャルプラデーシュ州。小西賢吾撮影）

こ) ダンスしながら議論するという感じです。

ブ) おもしろいー。

ク) 1限目には有効ですね!

全) (笑)

さ)ほんとにそれ, 第2クォータの「心理学」, 1限目来ていきなり突っ伏して寝てるのが何人もいたのを発見したとき, ガックリきましたよ...。

5. スイッチを入れる, 再び...

ブ) ここまで私たちが経験したように, 自分の世界や日常にないことを発見したわけでしょう。パンって手を叩いてから発言するっていうのはね(笑)。こういうのも学生たちに経験させてあげたいですね。

さ) だからね, 教室の中でどれだけ冒険させることができるかっていうことを前の対談でも話したんだけど, ボクラやっぱり少しでも実験してみるとか, つまり試みてみるとうか, そういうふうにやっていかないと, 彼らにも発見が無いだけでなくボクラにも発見が無いということになるからね。そういう意味でも授業の中で, 教室の中でいんな冒険ができるといいなあと思いますね...そうか, 立って話すというのはお互いにとっての信号になるということなんですね。

ブ) 座ったままでやりたい学生もいるでしょうけれども, それだとスイッチすることができないのでね。

さ) そうや, スイッチや, ね, 小西先生!

こ) うん, そうですね。

ブ) 安全な領域...

こ) 安全な領域にとどまっていたいというね。

さ) Comfortable zone⁽²²⁾やね。

こ) そう, それでアドベンチャーをどんなふうに作れるかっていう話をしたんですよ。

さ) その快適ゾーンをちょっとストレッチするように, ちょっと立ってみるとかちょっと大きな声を出してみるとかちょっとジェス

チャーをつけてみるとかね。

ブ) 特にジェスチャーは大事ですね。握手なんかもしたくないようなんですよ。

こ) うーん, そうですね。英語の授業だったらまだやりやすいところがあると思いますが, 静かに座って授業を受けるということが comfortableだと思っていることを, どういうふうにしていけばいいのか。

ブ) 外国人の先生からするとね, 先生が期待している態度とかスタイルとかが難しいですね。日本語でならまだできるのかもしれませんが, そういうのを実際にわかってくれるかどうかかね。

さ) だからさっきおっしゃったようなビデオを作ってこんな態度ですよこんな授業ですよっていうのを知らせるということが必要なんですね。

ブ) はい, そういうのを期待しています。

こ) こういうことは日本語の授業でも考えないといけないと思いますね。高校と大学とのつながりということも考えながら, ある種の授業では先生の言うことを静かに聞いて書き取るというのが授業の理想的な態度だと思ってやってきてる学生は少なからずいるので, それに関して1年次の最初の頃にそうではないということを言葉ではなくて実践で示してやる必要があるのかもしれない⁽²³⁾。

さ) だから, たぶん, 1年生の基礎ゼミなんかで先生たちが入れ替わり立ち替わり違う様式の授業をするっていうのは重要だと思うんですよ。今の小西先生のお話とつなげて考えると, 学生が生徒だったときに typicalな態度というのがありますよね。でもそれだと大学ではほとんど勉強できないんですよ, 学べないんですよっていうことを知らせるだけでいいんじゃないかってね。つまり, あーしなさいこーしなさいって一々言うんじゃないかって, コレじゃあダメなんですよっていうことだけを伝えればいいんじゃないかって思

うんです。そういうデザインが必要なんじゃないでしょうか。

ク) そーですね。

さ) それを翻って自由に学ばせるっていうことになるんじゃないかと思うんです。

ブ) それを大学全体でできるといいんですよ。

さ) 先生たちがそういう意識を持って1年生の最初にみんなて伝えることにすればイイと思うんですよ。

ク) 言ってますよ!

全) (笑)

ブ) 言ってますけど、単位がもらえればそれでイイっていう風なのもありますからね。

ク) 2学期は発言できるようになるはずですけどね。

こ) 人文学部はね、みんなね、留学から帰った直後が一番いいですね。

ク) そうですね。

さ) だんだんもとに戻っていってしまいませんか?

こ) そこから動き続ける子とそうでない子とに分かれるので...

ク) 発言のプレッシャーがないと元に戻ってしまう。

こ) まあそれは学生に限らず人間誰しもそうかもしれませんが...

ブ) 人文学部は特別な文化を守らないといけないですね。グローバルな文化も前の文化で埋もれてしまう。

さ) あなたはだれ、あなたはどこの人ってなるかな。ダンスってね、ほら、中学で必修になったけど、あれどんな意味があるんやろかって思ってたけど、ブローダウェイ先生の「言語はダンス」だっていうのを聞いてから、ほんとに意味あることかもなあって思い始めましたよ。表現しても言葉にしても、聞くっていうことであっても頭の中で思考をダンスさせなきゃなんないからね。

ブ) 社交ダンスね、思考ダンス(笑)。

さ) そう、だから、いろんなダンスがあるなと思ってね。おもしろいですよ、ダンスっていう考え方ね。ダンスさせるにはどうしたらいいかってね。

ク) Danceとmonastic discussionと...

ブ) すでにこの4人は同じような気持ちにあると思うんですが、あとはどこまでできるか、チカラがあるか、ですね、作戦を立てないとね。

ク) ちょっとだけ、ちょっとずつでも進めば満足です。

—中略—

6. ローカル最適化からの脱出

さ) こういうね、スイッチの入れ方とか、出力のさせ方とか、いわば発言に関する消極性に対してどのようにしていけばイイかっていう話になるとね、ここでね、この対談シリーズではいつも「中略」にしているところが毎回生じるんです。それはね、「カナザワノヒト談義」と二人で呼んでいる話になるんですよね⁽²⁴⁾。

ブ、ク) ああそうですか。

ブ) 私も金沢に長いけれど、いつも関西に行くときビックリします(笑)。

さ) 電車の中とかでもいろいろ聞こえてきますもんね。

ブ) うん、すごく話しやすい!

ク) 関西なあ、また行きたいなあ...

こ) そうなんですよ、ほんと不思議...

さ) そう、モールみたいな大規模店舗へ行っても声がたくさん聞こえてくるんですよね。でもこっちだとアウトレットモールとかへ行ってもちっとも聞こえてこなくて静かな感じがしませんか?

ク) うん、そうですね、静かですね。

さ) 聞こえてくるのは店員さんの声と背景の

音楽くらいでね。

ク) こっちの人たちは話さない, かな…。

こ) ただ, 必要以上に話さないとか自分の意見を表明しないというようなことが, ここの社会で生きていくためには有利だということを大人たちが判断している可能性があって, そうなると, 積極的に話さない, 意見を言わないさってというような教育をするのは…。

ブ) いけない…! (笑)

全) (笑)

さ) ボクらいけないことを教えてるんじゃないかってね (笑)。

こ) みんなで様子を見合うんだってね。

さ) シャベらないほうがいいぞってね。

ク) **Keep your head down!!**

こ) やっかいなことからは逃げたほうがイイとかね。

ブ) ほんとそうですね。

さ) そのギャップがね, まあ, 人文学部の子たちは, 留学して帰ってくるとやっとなボクらの目から見るとふつうに見える人間に成って帰ってくるように感じるけれどね。短大の子たちでもおしゃべりするっていうことをほとんどしない学生も多いのでね。

こ) そうなんですよ。

さ) あの一, よくほら, 金沢の大学だと「金沢学」というような名前の科目があったりするでしょ。ボクね, あれね, 逆に, 「非金沢学」っていうのがね…笑

全) (大笑)

さ) そう, つくれるとね, いいなと思うんです。

ク) どこでもいけるね!

こ) わざわざ金沢学をやらなくても, 自然と身につけていくんですよ。だから, よく学生に言うんですが, この大学の学生の9割は北陸出身で, もしかしたら一生北陸から出ない場合もあるわけですよ。例えば, ここで就職して, ここで家族を作るとするとね。だ

からこそ大学生のうちくらいは外からの強い刺激が無いといけないなと思うんです。これはすべての学部に通通すると思います。もちろん地域に貢献する人材を育てることも大切ですが, そこから飛び出すこともどこかで経験させたいということはあるですね。よそ者の勝手な考えかもしれないけれど。この大学は北陸でふつうに暮らす中で, 地域を支える卒業生をマジョリティとして送り出す役割を担っている面があります。ただ, 個別の授業の中でどこまでローカリティにおもねるかどうかは別問題かもしれません。

さ) 「ふつう」, ってなんででしょうかということになるかもしれませんけどね。一中略一学生も同じでね, 金沢の子たち, 北陸の子たち, というのではなくて, 日本の子たち, 世界の子たち, というふうになっていって欲しいと思うんですよ⁽²⁵⁾。

こ) ローカリティからの脱出ですね。

さ) そうそう, だからね, グローバルになるというよりも, ローカルでなくなるというふうに考えるほうがイイかもしれません。「非金沢」学的な考え方と言うのはそういうことかもしれません。

ブ) そうですね, それで十分かもしれませんね, 「非金沢」学ね。

さ) そうなのね, 「教養力」, かもしれません。

いつもね, このローカルな話になったとき, よく小西先生と二人で言ってるのは, 「カナザワノヒト」という新しい人たちがいるんじゃないかってね (笑)。そのくらい関西から来たボくらにとっては違う感覚というか, そういのが感じられる機会が多いですね。

ブ) そんなに変わってる感じですか。

こ) ただ, もしかすると, 実は最もプロトタイプ日本人, あるいは日本人的な感覚の人たちということなのかもしれないなとも思っています。よく言うのはね, 金沢に来る

と、あ、日本に来てしまった、という感覚ですな(笑)。

全) (笑)

さ) そうか、最も日本!!

こ) 僕が育った環境、関西は日本ぽくなかったのかもしれないとね、あだからココって日本かもしれないなってね。

ブ) 私もテキサス出身だから、アメリカの大きな感じのカウボウ的な西部劇のようなね、そういうアメリカらしいアメリカにいましたから、よくわかります。...私もそこから逃げたんです(笑)。

全) (大笑)

さ) そっか、みんなそうやって生きてきたというか、ローカルから逃げてきたというか、出てきたということなんですね。

ブ) そうそう、グローバルなほうにね。総合的な人間のほうにね。それ、忘れないでね!! 業績としてね、総合的な人間を育てる、どんな学生を育てるかということですね。

こ) 僕もさっき言ったように学部の学位は学士(総合人間学)ですからね。卒業式のとくにみんなで冗談で、これで僕らも総合人間に成りましたっ、とか言って喜んでたわけですからね...。今でも総合人間とは何かはわかりませんが(笑)、総合的であれという態度はどこか自分の研究や生き方にも影響していると思います。

さ) 総合ってというのはね、これからの日本では必要になるのは当然で、スペシャルなことだけでできればイイっていう社会ではなくなってきたからね。スペシャルな仕事ってね、たぶん、AIに取り替えられてくと思うのですね。総合な人ほど取り替えられにくいはずなんです。なぜなら、プログラムしにくいから、ですね。でも、スペシャルなことってというのはフレームに制約があってアルゴリズムもある程度決まっています、つまりは機械に取り替えやすくなるわけです。だから、バラツ

かせるっていうことが大切で、多様な価値観をもっていいし、考え方もいろいろあっていいし、知識だってマルチな discipline に渡っていてもいいし、それは明らかだろうと思うんです。感情とか感性とかであってもね、いろんな面があるっていうのが人間本来だし、人間らしいってどういうことかってことですな。

ク) そうそう、知識を「結ぶ」ということが大事ですね。

さ) そう、関係づけるということですね。

こ) 知識のネットワークを作ってうまく関係づけられるかどうか大切ということですね。

さ) そう、だから、ブローダウェイ先生がおっしゃった地理っていうのが大事ってボクも思うのは、空間的な関係づけをいろんな知識との間で行うということだし、未来ということが出てきたように、時間的な中で自分をどのように位置づけるかということ、それから、いまある知識といまある知識とをどのように関係づけるかということ、ですね。そういうことが総合的な人間、あるいは「教養力」のある人間の始まりであるんじゃないかと思うんですな。

ただ、その総合性というのはね、AIのように自ら学ぶような機械にとっては、実はそれも得意分野になり得る可能性がおおいにあって、最適解ではないけれどもおおよそ良い解を提示してくれる、分析してくれるということはできるようになってきてますから、その点での総合性というのは人間も負けになる可能性は当然あります。でも、それらからでてきた知識をさらにどのように使うか、どのようにつなげるか、結ぶか、意味づけるかというのは、まさに人間の生きる活動本来ということになっていくのでしょうか。

7. おわりに

教育には、学生をある程度縛って方向づける

側面と、学生を縛っているものから解き放つ側面とがある。前者は、「社会に役立つ」人材として送り出すために必要であり、学生の「社会化」⁽²⁶⁾のプロセスとしての側面である。その一方で後者は、教養教育で重きのおかれる側面であり、単に「使役される」ことのない人間の育成を目指していくプロセスとして重要だと考えられる。ICTを活用した様々な教育ツールや身体を使った学びは、そのための仕掛けとして位置づけられる。大学教育においてはまた、大学に入るまでに身につけた考え方や身体の使い方を積極的にリセットし、これまで育ってきたローカルな文脈から解放される段階がある。より広いグローバルな価値観に触れるために不可欠な段階としてである。学生はこうした過程を経て、グローバルとローカルとを往復したり、新たなローカルに出会ったりしながら、自分の価値観と居場所や役割を見いだしていくことが求められる。そうしたことへのサポートが教養教育の役割の一つであり、多様な文化的背景や専門分野を持った教員たちだからこそできることでもあり、ひいては現代の大学教員のあり方の重要な特性を示していると言える。

本対談の中では、教養のもつ二つの特徴的な方向性も示された。一つは、共通語としての教養のはたらきであり、学生として多様な他者と対話し協働する際に必要な知識や技法、そして

考え方の集合体である。もう一つは、対話と協働の場において学生が自らの役割を見いだしていく力そのものである。こうした教養に関わる機能は、この対談で「教養力」として示された力である。それぞれの学問分野の考え方と知見だけでなく、日常とも関連づけ、多様な情報を受け止めて解釈し、オリジナルな自らの考えへと総合性指向をもって練り上げていくような姿勢と態度である。

今回の対談には、言語教育を通じて複数の文化をまたいだ教育に携わっている二人のゲストを迎えて、リベラルアーツとの比較から日本の教養教育を俯瞰し、相対化する試みも行った。カリキュラムとして教養教育は「フルコース」⁽²⁷⁾であるのがよいか、「アラカルト」であるのがよいか。またそこに大学のphilosophyをどのように盛り込んでいけばいいのか。さらに、実際には様々な制約があるなかでのカリキュラム編成と運用において、学部の専門性と教養教育との相互作用はどのようなありかたが考えられるのか。教養教育に携わる教員と教養教育と一体となって進行する専門教育に携わる教員が、ともに「教養力」についての議論を重ね、学生をどのような人間として育てていくのかという意識を共有していくことこそが重要であり、今後も引き続き多様な議論を繰り広げていきたい。

注

- (1) 佐々木康成, 小西賢吾, 川村義治, 桑野萌(2017)習いを超え, 学びを超え, 創造的な人に成る—ことばと思考の捉え方—, 金沢星稜大学人文学研究, 第2巻第1号, pp.61-86。
- (2) 佐々木康成, 小西賢吾, 中村朱美(2018)ことばの育て方と創造性—異質なことばの受容と運用を探る—, 金沢星稜大学人文学研究, 第2巻第2号, pp.51-82。
- (3) ここでいうハードスキルは、数学や科学や技術などの産業社会に対して直接的な価値のあるようなスキルのことを指しており、一般的にはむずかしく、かたく見られているようなスキルのことであり、一方ソフトスキルは、人間関係やコミュニケーションで必要な一般的にもやわらかく、かんたんな読んだり書いたり話したりするスキルのことである。Writingに関しては「ハード」であると見る向きもある。
- (4) <https://www.college.columbia.edu/core/lithum> (2018/12/24参照) より作成。
- (5) アメリカの高等教育のうち、各地域のコミュニティに対応した教育に合わせたおおよそ2年間で大学(進学準備)教育や職業教育を行う公立の大学を指す。地域間や共同体間のdiversityに対応した施策であると言える。このほかにアメリカの高等教育には、リベラルアーツカレッジ, ユニバーシティが

ある。

(参考)

溝上智恵子・森利枝(2010)アメリカの大学・学位制度, 学位と大学, 1, 233 - 263. 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 (https://niad.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=176&item_no=1&page_id=13&block_id=17)

小林明(2017)米国のコミュニティカレッジに関する一考察～高等教育機関としての認定～ 明治大学国際日本学研究, 9, 15-30.

- (6) 金沢大学が2016年度から始めた新しい共通教育の科目群の総称。(参考) https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=7351&item_no=1&page_id=13&block_id=21
- (7) おそらく数学をふつうに教える教員にしてみれば, それでもまだおおよそに「証明」している, あるいは教えている, という感覚であるかもしれない。
- (8) これまでのこの対談シリーズで佐々木が何度か言及してきた, 担当科目をうまく使って, あるいは専門分野をうまく使って授業を行ったり考えさせたりすることであり, 専門知識自体を教えたり担当科目そのものを教えるという態度とは異なる, 言わばツールとしての専門分野や担当科目としてのあり方を強調する教え方である。
- (9) 本学の建学の精神である。
- (10) 今年度2018年度は教養教育部長としての役割を担っているが, この紀要での対談シリーズでまとめてきた「教養教育とその周辺」で整理されてきたことをもとにする場面は少なからずあり, 教養教育に関する大学への様々な提言が幾分スムーズにできていることは実感される。
- (11) http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/pub/housen/31/housen31_p7-8.pdf (2018/12/24参照)
- (12) <http://pub.maruzen.co.jp/videosoft/shakespeare/> (2018/12/24参照)
- (13) 現在は, 本学学長。女子短期大学の学長も兼ねている。
- (14) <https://voicethread.com/>
- (15) International English Language Testing System。プリティッシュ・カウンシル, IDP:IELTS オーストラリア, ケンブリッジ大学英語検定機構が共同運営を行う, 海外留学や研修, 移住などを目的とした英語力証明テスト。Reading, Writing, Speaking, Listening の4セクションからなり, Speakingでは面接官との対面インタビューが課せられる。本学人文学部の学生は1年次で2回受験し, 取得スコアに応じた大学・コースに留学する。
- (16) 注(14)参照
- (17) 本学の授業や課外活動等で利用されているLMS機能のある学修支援システム。
- (18) 本学で利用しているWebメールシステム。
- (19) 本学で全職員および学生が利用する教学情報管理システム。
- (20) 本学のIR (institutional research) 担当の部署として今年度から新たに設置された事務組織。
- (21) チベットの大規模な僧院では, 僧侶が共同生活を行いながら教養の習得に励む。博士号に相当するゲシェーの学位を取得するためには15年以上を要する。経典をはじめとする教義と, 関連する理論に関する膨大なテキストを十分に暗記, 理解した上で, インドで発達した仏教論理学の形式に則った問答を行う。上級の内容を学ぶ場合や, 学位の申請にあたってはこうした形式に則った厳格な試験が行われる。問答の映像は, たとえば次のウェブサイト <https://tibethouse.us/tibetan-buddhist-debate/> (Tibethouse US: ダライラマ14世がアメリカに設立したチベット文化センター) でみることができる。
- (22) 佐々木康成, 小西賢吾, 大島菜穂子(2018)型にはめる教育と冒険させる教育—大学教員という仕事のなかでできること—, 金沢星稜大学人文学研究, 第2巻第2号, pp.61-97。プロジェクト・アドベンチャーに関する紹介とともに, 学生たちにどうやったらやる気のスイッチを入れられるかということについても議論されている。
- (23) もちろん, スクール形式で教師が教壇から講述するタイプの授業が必要であることも筆者らは十分理解している。
- (24) 佐々木は滋賀県出身, 小西は兵庫県出身であり, 金沢星稜大学に赴任して初めて北陸での生活を経験している。ブローダウェイは1992年から金沢在住, 2年間の一時帰国をはさんで2018年に本学に赴任した。クラスンは2001年に関西外国語大学に留学生として来日し, 大学卒業後2003年から福井県内の中学校と小学校でALT(assistant language teacher)としての5年間を過ごし, 2016年から本学に着任した。
- (25) 佐々木の小学校での入学式で校長が「日本の子どもたちを育てていきます」というようにお話しされたのを本対談後日の母親との電話で聞かされたことは奇遇であった。
- (26) この対談シリーズでよくふれられているいわゆる「オトナになる」ということでもある。
- (27) 大学設置基準の大綱化以前は, 専門教育科目76単位を含む卒業に必要な計124単位の中に, 一般教育科目36単位, 外国語科目8単位, 保健体育科目4単位が含まれていた。